伊藤青少年育成奨学会
奨学会だより
臨時号
令和5年1月15日

奨学生の活躍

学業に、スポーツに、そして新たな進路に向けて、奨学生の皆さんがそれぞれに頑張り、活躍してくれています。『奨学生だより』では、臨時号を発行して、令和四年十一月の奨学生報告からその一部を紹介します。

パラ水泳世界大会日本代表

平泳ぎ準優勝　背泳ぎ三位

岐阜協立大学一年の近藤薫さんは、十一月二十三日から二十九日まで、ポルトガルで開催されたIWAS世界競技大会に日本代表として出場、一〇〇m平泳ぎ準優勝、同背泳ぎ三位、さらに二〇〇m個人メドレー四位、五〇mバタフライ四位に入賞しました。

岐阜協立大学
経営学部 スポーツ経営学科 一年
近藤　薫

私は将来の夢を叶えるため、今できることを全力で行う！と決めています。一年次より研究に参加し様々な分野で学び、幅広い人脈形成を行うことができました。講習会や講演会にも積極的に参加してきました。恩師を通じて小学校の体育水泳授業や授業補助、キャリア教育授業でパネルディスカッション方式での講演も行いました。私と出会った人達が将来社会に出たとき、出会った障害者や困り感のある人達への偏見をなくし優しく寄り添い共に生きてくれたら嬉しいです。今後も日々の授業一つ一つを大切に学び、取れる資格を取得し、できる限りのボランティア活動を行っていきます。健常の世界で生きる障害者として、パラスイマーとして活躍し、積極的に世の中にでて発信していくことで、健常者と障害者の架け橋を目指していきます。

●二〇二二 ジャパンパラ水泳競技大会（九月・横浜）
一〇〇m背泳ぎ一位・四〇〇m自由形一位・二〇〇m個人メドレー一位

●全国障害者スポーツ大会「いちご一会とちぎ大会」（十月・栃木）
五〇m背泳ぎ一位・五〇mバタフライ一位（大会新記録）・岐阜県選手団選手会長

●第三十九回 日本パラ水泳選手権大会（十一月・長野）
一〇〇m背泳ぎ一位・五〇mバタフライ二位

東京藝術大学 美術学部 工芸科 三年
吉本　安莉

大島椿さんの創立九十五周年を記念したロゴをデザインし、商品のラベルや記念碑に使っていただいて、とても嬉しかったです。

大島椿

自然の生命力や島の文化、椿を育てる方の情熱に触れることができ、それらを制作テーマに盛り込みました。島のシンボルである椿の花、三原山、島の女性「アンコ」さんの装束に使われる市松模様を表現しています。このロゴから島を思う企業の熱意が伝われば嬉しいです。

「伊豆大島には椿と自然と椿油のある豊かな暮らし、文化が根付いています。そのすばらしい自然と文化を絶やすことなく後世へとつなげていくことが、椿油専門メーカーである大島椿の使命だと思っています。」
（代表取締役社長　岡田　一郎）

『地域学実習を振り返って』

岐阜大学
地域科学部　地域政策学科　三年
河口　寛紀

私は肢体が不自由であることもあり、幼い頃はリハビリ施設に通っていたが、そこで他の障害のある人を目撃することはあっても、実際に交流するということはほとんどなかったと記憶している。その後は保育所や小中学校の普通学級に進み、知的や聴覚など様々な障害のある人と同級生となることもあったが、そこでも深く交流することはなかった。そうした環境の中では、支援を必要とする人々の生活や労働に関する実態はほとんどわからず、無意識の偏見が積み重なっていたと感じる。

実習に先立って行った事前学習で、障害のある人の就労に関する歴史やその実態について学んできた。重い障害があることによって社会から排除され生命すら奪われてきた歴史、制度には以前に比べ進歩がみられるものの、依然として就労が難しい人や生活の助けになるだけの収入が得られない人が多くいること、雇用水増し問題のように政策の本気度が問われるような事態が起こっていること、いずれも衝撃的であった。

五回にわたる実習で目の当たりにしたのは、制度に不備がある中でも、現場による努力によって、障害者への固定観念を打ち破ろうとする職員や利用者の姿であった。これまで私には、福祉サービスを利用している障害者は「かわいそう」な人々であるといった偏見があったと言わざるを得ない。それは、一般の労働市場や教育現場の外側にいる人々は将来の可能性が制限され、いわば彼らの人生は家族や福祉制度によって「保護」されるものだという考え方に基づいていた。もちろん、福祉制度等によって弱い立場にある人の生活を保障していくことはとても大切なことである。しかし、光陽福祉会は「障害者は何もできないかわいそうな人々で、保護されるだけの存在である」というような典型的な固定観念に真っ向から立ち向かい、職員や他者との協働によって利用者自身が自立し、可能性を広げ、より良い暮らしを自らの手でつかみ取ることを目指すという一貫した姿勢が見受けられる。

未就学の段階から、発達に不安を抱えている子に対して手足や体幹などを鍛える活動のみならず、遊びの中でブロックの貸し借りなどを通じて社会性を身につけ、学びを得るというような場面もあり、集団行動への適応が遅れているなどの理由で集団の中から排除されがちな障害児にとってはとても貴重な経験だと感じた。こうした方針は高校生まで一貫しており、子どもたちが失敗することを恐れずどんなことにでも挑戦できる環境があることで、何気ない日常生活の中で学びを重ね、そうして積み重ねた経験が自信につながっているのだと、利用者の明るく積極的な姿から感じ取ることができた。

高校卒業後に通う施設においても、従来の福祉や障害者像を覆す光景が広がっていた。多くの事業者が工賃の確保に苦労している中、より単価の高い仕事を受注することによって、結果として高い工賃を実現している。このことは何も取引先に慈悲を乞うて成し遂げられるものではない。利用者も立派な労働者であり、適切なサポートがあれば十二分に能力を発揮し、成果が挙げられるということを証明し続けているために可能になっていることである。利用者一人一人を知り尽くしたジョブコーチや特に優秀な利用者によって、それぞれに合った声掛けや助言が行われることや、毎朝に目標を明示し達成できたときには全員から拍手が送られることなどを通して利用者のモチベーションを促進し続けることによって、利用者の成長と業績の向上、そして取引先や地域からの信頼がもたらせていることが理解できた。

今回最も衝撃を受けたのは、利用者が長時間にわたって立ち続けながら同じ作業に集中し続ける姿で、その体力と集中力は今の自分には真似できず、こうした能力は長年の取り組みによって身についているだと感じた。利用者一人一人の人生における可能性を広げ、社会との距離を縮めようと尽力する事業者が増えていくことを願っている。五回の実習で、自分の中の障害者像は大きく変化した。協力してくださった全ての方には、感謝してもしきれない。この経験を、今後の人生においても生かしていきたい。

（「障害者の就労に関する現状と課題」より抜粋）

映画『宇宙人の画家』劇場公開

京都大学 文学部 人文学科　四年
保谷　聖耀

私が去年監督し制作した映画『宇宙人の画家』が、七月から劇場公開を迎え、東京に始まり、関西、名古屋、福岡…と全国のミニシアターで上映されました。数か月前から配給会社の方と宣伝活動をし、美術家の会田誠さんや映画評論家の小野耕生さん、漫画家の石黒正数さん方をはじめ多くの著名人の方にコメントをいただいたり、キネマ旬報七月下旬号にて映画監督、脚本家の高橋洋さんと対談させていただいたりしました。

また、七月上旬に韓国で開催された富川国際ファンタスティック映画祭では、国際長編コンペ部門にノミネートされました。現地でのティーチインもあり、同世代のお客さんたちが沢山見に来てくれて意見交換もでき貴重な経験でした。良くも悪くも、日本と海外の映画の制作体制の大きな違いや映画に対する意識の違いも大きく感じ、もっと頑張らなければと思いました。

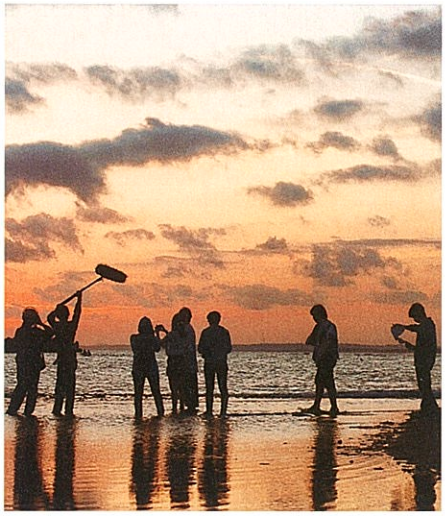
とにかく、自分の作った映画がこうして多くの方の目に触れられていくというのは不思議な感覚でしたが、劇場で観客の方の生の感想をいただくとやはり嬉しいです。名古屋のシネマスコーレという劇場で上映した際には、高校の時の恩師や同級生も見に来てくれました。高校生の時から映画を撮り続けてきたことが、こうして地元での上映という形で還ってきたということがとても感慨深いです。

今回の映画ではこれまでにはない規模で沢山の方に協力していただきながら制作、公開することができたことを感謝しています。大学卒業後も、初心を忘れず映画制作を続けていきたいと思っています。

映画制作をみんなで

静岡文化芸術大学　デザイン学部
デザイン学科　四年
久世　朱莉

所属している映画制作チームｂｆ（blinking frame）では、二年ぶりに本格的な映画製作を行っている。あえて監督を立てずに演出担当や脚本担当、編集担当などに分かれて全員で一本の映画を作り上げるスタイルで、私は撮影監督という役割を担当した。撮影監督は、脚本を元に絵コンテを描いたり、カメラの操作、撮影画角の決定などを行う役割である。九月からの撮影では、朝焼けを撮影するために深夜二時から自転車で海へ向かったり、運転シーンを撮影するためにルームミラーを使って工夫したりした。チームのみんなで一つの作品を作り上げていく事がとても楽しく、充実した大学生最後の夏休みを過ごすことができた。次は公開に向けて、編集作業を頑張りたい。



理想の創作活動を目指して

日本大学 芸術学部 放送学科　四年
荒谷　桜

創作活動をしない日は一日もないほどでした。そして今、学年で一番の成績優秀者として認められた事にも、大きな達成感を感じています。この事実が、高校生の頃から掲げている私の「地方と都市部に存在する文化資本の差を無くせるような活動をしたい」という目標の達成に、努力で近づいた証拠になると思うからです。私は岐阜で生まれ育ち、上京後は自身のこれまでの経験不足を補えるようにと民俗学・演劇論・放送文化の表現など、幅広い講義を履修することで、理想の創作活動をするための土台作りに励んできました。その結果が、「ある年度の日芸放送の成績優秀者は、岐阜の子だった」という事実になり、それを大学に卒業後も残していけることで、今後、放送芸術を学びたいと志す地方の学生の、諦めない理由を一つ増やすことに繋がると信じています。

また、個人的に制作を続けていた、東濃の廃仏毀釈の歴史をモデルにして執筆した民族ミステリものの二十万字級シナリオが、ＳＮＳにて評価され、ある新人コンテストで佳作をいただける事になりました。

夢の追求

京都大学大学院　理学研究科　二年
杉浦　駿

私は修士課程終了後も素粒子論分野の研究者として活躍していくことを目指しています。博士後期課程への進学は修士課程入学時点から希望しており、日本学術振興会特別研究員ＤＣ１への採用内定をいただくことができたため、博士後期課程の三年間は学振特別研究員として研究活動に従事する予定です。私は幼い頃より「物質は何からできているのか？」「世界の果てはどうなっているのか？」といったこの世界の仕組みに関心がありました。この素朴な疑問と好奇心、世界と物理学への情景は、やがて生涯を賭した夢となり、現在では素粒子論の分野で研究者として活躍していくことを目指しています。私が専攻する素粒子論は、物質の最小構成単位である「素粒子」や宇宙全体の構造である「時空」など、世界を形作る根源的な対象について理論的な側面から研究する分野です。現在に至るまで、素粒子は微視的スケールの理論である「量子論」、時空は巨視的スケールの理論である「一般相対論」を用いた記述が成功を収めています。しかし、これら二つを統合し、時空の微視的構造を記述する理論を構築することは、今もなお最も重要な未解決問題のひとつとして残されています。これが私の大きな研究テーマである「量子重力理論」の問題です。この量子重力の性質を探る手掛かりとして重要だと考えられるのが、ブラックホールがその蒸発に伴って内部にあった情報を失ってしまう「情報喪失問題」です。量子論に基づけば情報は必ず保たれる必要があるため、情報喪失問題は量子論と一般相対理論との本質的な矛盾を明らかにしたものと言えます。私は博士後期課程では、修士課程での研究を発展させ、重力理論におけるカオスという観点からこの情報喪失問題を解析することで量子重力の持つべき性質を解き明かし、世界を記述するより基礎的な理論の構築を目指していきたいと考えています。

”墨をのせる“”白を残す“

名古屋工業大学　工学部
物質工学科　五年
石橋　穂

五年間の学生生活は私に自身を見つめ直す時間、そして多岐にわたる学びを与えてくれました。

私は四歳から十二歳まで書道の塾に通い、高校の三年間も書道部で活動していました。親しみ深い存在であるためか、自身を見つめ直す中で自己とは書のような物であると考えるようになりました。毛筆において「字を書く」ではなく「墨をのせる」、「白を残す」と表現することがあります。墨をのせるとは自己を主張、認識する事であり、白を残すとは他者からの評価の余地を残す事です。一方の主張が強ければ他方は譲歩を強いられます。しかし滲みや掠れにより作品に深みが生まれるように、必ずしも他者と自己を白黒はっきりと区別して、互いの認識の全てをすり合わせることが必要なわけではないと考えています。時間の経過や環境の違いによる滲みの変化を把握し許容し、とめるべき所は誤魔化さずとめ、はねる所は心から躍動し、はらいは最後まで気を抜かず。大学という社会へ出る前に自分のために使える十分な時間をいただいたおかげで、今後の指標にしたいと思えるこのような見解を得ることができました。

食のプロを目指して

愛知大学　地域政策学部
地域政策学科　三年
安藤　美咲

私は、内閣府の新資格制度「食の六次産業化プロデューサーレベル３」の取得に向け、豊橋技術科学大学で開講している人材育成プログラムを受講しています。これは、内閣府によるキャリア段位制度の一つで、一・二・三次産業の一体化や連携によって、食分野で新たなビジネスを創出していく人材に対して与えられる資格です。レベルが1から7まであり、プロレベル一歩手前のレベル３の認定を受けるためには、研修機関等でビジネス計画やマーケティング戦略についてのカリキュラムを履

ウクライナの悲劇

公益財団法人伊藤青少年育成奨学会
理事長　田代　久美子

「ヨーロッパの穀倉」ウクライナで一九三二年から一九三三年にかけての大飢饉による死者は三百五十万人とも五百万人ともいわれる。スターリンによる農業集団化と外貨獲得のための食糧徴発によって、ジェノサイド認定をのちに求める悲劇は起きた。

スターリンは優秀な生産技術を持ち、熱心に働く農民を富農ブルジョワジーと敵視し、土地を取り上げたり処刑したりと絶滅政策をとった。その上で農地を国有化し、農民は集団農場や国営農場で働くことになった。家畜も集団農場のものになるくらいなら食べてしまおうとした結果、鶏牛馬などが激減した。中国で農業の集団化を図り、人民公社にした時も同様。また集団化による労働意欲の減退により、農業の生産性は落ち慢性的な食糧不足が起きる。

一方、遅れた農業国だったソ連は、社会主義の優位性を示すことに躍起になり急激な工業化に走る。都市部の労働者の食糧確保のため、ウクライナから小麦を都市部へ送る。また機械類輸入の外貨獲得のため、ウクライナから小麦を取り上げ輸出に回した。飢餓は極限に達し、市場で人肉が売られた。

この大飢饉の実態が明らかになったのはソ連崩壊後ウクライナが独立してから。米ソ冷戦終結後、ソ連邦の武器庫であったウクライナは、ＮＡＴＯに加盟すれば軍事力は不必要と考え、ロシアの強力な要請に屈し、当時保有していた核兵器全てと戦闘機など主要装備をロシアに渡した。六割ほど完成していた空母は鉄屑の値で中国に売却。いまやそれらの武器でロシアに恫喝攻撃される。これらの歴史や経緯があるからウクライナは徹底交戦する。

信頼され、感謝される人間

早稲田大学　法学部　四年
神田　耕太郎

自分なりの方法で「農林水産業、食、地域の暮らし」を支えていきます。これまでの人生を振り返るなかでも、自分の中で意味を見出せる、腹落ち感のある目標を掲げ、それに向かって努力する時にやりがいを感じてきました。その目標を実現するためにも、「①武器がある→②頼られる→③感謝される」構造を自ら創り出していきます。入社する企業には、投資業務、融資業務、ＪＡの組織統括業務等多岐にわたる業務がありますが、いずれの業務を担当することになったとしても目の前の仕事で自分の武器、専門性を磨き、社内、社外問わず関わる相手に信頼され、感謝される人間になりたいと思います。また、人として成長し続けるために以下の三つのことを胸に刻みながら日々精進したいと思います。

一　目の前の人、その先にいる人を思い遣り続けること
二　謙虚に学び続けること
三　周囲への感謝を忘れないこと

これからも一つ一つの出逢いを大切にしながら、目の前の人を幸せにできる人間になれるように精進して参ります。

修することが条件として課されています。

講義は毎週土曜日に行われ、農業や食品分野の仕事に携わる行政や民間企業、大学教授の方々から、マーケティング戦略や農業経営、食品衛生などについて学びます。元々社会人向けのプログラムということもあり、講義の内容が難しいと感じる時もありますが、様々な業界の人を通じて食や農業について深く専門的に学ぶのは面白く、毎回刺激を受けています。十二月には自分が考えた六次産業化のビジネスプランを発表する機会があるので、今までの勉強の成果が出せるよう真剣に、そして柔軟な発想でプランを考えていきたいです。

夢の舞台「早慶戦」

慶應義塾大学　総合政策学部
総合政策学科　二年
日置　南智

硬式野球部に参加しています。春の一、二年生が出場できるフレッシュリーグでは、法政大学戦と早稲田大学戦の二試合に出場することができました。どちらも最後の回に守備で出場しただけですが、幼いころから夢見てきた神宮球場での〝早慶戦〟に、KEIOのユニフォームを着て出場することができ、感無量でした。また、私が幼いころより「神宮球場での早慶戦に出場すること」を夢として語ってきたので、それを応援してくれていた地元岐阜県の友人らが、球場まで応援に来てくれました。仲間の存在は大きいです。私も誰かを支えられる人でありたいと改めて思いました。今後も、まずはベンチ入りすること、そして少しでも長く試合に出場し、活躍できるよう日々鍛錬していきます。

41番が私です。（隣の５番は、巨人時代の父の背番号「５」を背負い４番で先発出場した、慶大の〝清原ジュニア〟）

フランスで新境地を開く

東京藝術大学大学院
音楽研究科　一年
野村　花

私はこの夏、オーボエのレッスンを受けるため、約二週間フランスへ渡航し、音の響き方が全く違うということに驚きました。空気の質や建物の材質、構造など、様々な要因があると思います。先生や他の学生の音を聴いても、力を抜いて体から声のように音が出ていて、楽器に力で立ち向かっていた自分が愚かしく思えるような衝撃を受けました。その感覚で練習していると、いくらでも吹き続けられるような万能感に満たされ、ずっとヨーロッパで楽器を吹いていたいと思うほどでした。

また、室内楽（少人数のアンサンブル）のレッスンも受講し、フランス人の学生二人（フルートとファゴット）とベートーヴェンのトリオに取り組みました。お互いに不自由な英語でのリハーサルでしたが、妥協せず、何とか言葉や演奏でコミュニケーションを取って進めました。最初は異なるバックグラウンドを持つ三人のアプローチの違いに驚きましたが、だんだんと一つの音楽にまとまっていき、共通言語としての音楽ができることの楽しさや感動を覚えました。

帰国後、管打楽器コンクール、日本音楽コンクールという二つの大きなコンクールに挑戦し、どちらもセミファイナルまで進むことができました。目標には届かず悔しさも大きいですが、自分の伸び代として捉え、これからもひたむきに音楽に向き合っていきます。

四〇日間のヨーロッパ旅行

早稲田大学　商学部　二年
武藤　修一郎

バックパッカーをしたいという希望があったため、アルバイト代を貯金して、この夏、四十日間ヨーロッパを旅しました。ユーレイルパスという鉄道乗り放題券を使い、フランス、ドイツ、チェコ、オーストリア、スロバキア、ハンガリー、イタリア、ヴァチカン、スペインの九カ国を巡りました。宿の手配や移動手段の確保など、全て一人で行い不安なことや苦労したことも沢山ありました。しかし、勇気を出して行動して良かったと思える景色や体験がたくさんできました。特に印象に残っているのは、スペインのブニョールという田舎町で行われるトマティーナというお祭りに参加できたことです。世界の人たちとトマトをぶつけ合い、ひとつになれました。イタリアのカプリ島の青の洞窟で見た景色も心に残っています。

公益財団法人
伊藤青少年育成奨学会
〒507-0062　岐阜県多治見市大針町661番地の1
株式会社バローホールディングス本部内
※Eメールアドレス、電話番号はホームページでご確認願います。
https://www.ito-zaidan.or.jp
発行　公益財団法人
伊藤青少年育成奨学会
印刷　新日本印刷株式会社